

【論 説】**小動物臨床における中医学の実践について**

重信 隆夫

(株)アニマルクリニック永山公園 (〒060-0032 札幌市中央区北2条東7丁目82 ラポール永山公園西棟1F)

-----北獣会誌 67, 220~223 (2023)

大動物臨床においては、古くから馬を対象とした中医学を元とした東洋医学診療が行われ、一部は牛にも試みられてきた。しかし、いわゆる愛玩動物、とりわけ犬、猫に対する中医学の実践についてはようやく端緒についたところであり、中医学に関する理解については一般の飼い主のみならず、獣医師にも浸透は浅いと思われる。

当院は2013年4月の開院当初から中医学に基づく診察・治療を実践してきたので、広くその存在と効果について知って欲しく、当院の中医学診療概要を報告する。

1. 当院の概要

当院は札幌市中央区の市街地に立地し、現在、獣医師2名、動物ケアスタッフ5名体制で中医学を中心に一般診療も実施している。中医学診療は全体の6割以上を占めており、鍼、灸、漢方を中心とした獣医療を実施している。

以下に中医学の基本概念等と当院の取り組みを紹介する。

2. 中医学の歴史概略

中医学の起源は人類が火を使うようになってからといわれている。火で体を温めて揉むことで、病や痛みが軽くなることを発見し、次第に体系化されてきたと言われており、中国の春秋戦国時代に書かれた黄帝内経、素問、靈樞が全ての基礎理論となっている。

中医学は5世紀半頃に朝鮮半島を経由して日本にも伝えられたと言われている。以後、日本独自に発達してきたが、明治時代に国として西洋医学が正式な医学として採用され、中医学は衰退した。しかし、近年は治療が体に優しく、西洋医学で解決できない疾患に効果があるこ

とが注目され、日本はもとよりヨーロッパや米国で注目されている。

3. 中医学の理論概念

中医学にとって、「気」の概念が最も重要である。古代の人々は詳細な自然の観察から、「気」の理念を作り上げた。万物の根底に存在するのが「気」であり、「気」が元で生命が誕生したと考えられている。極論するならば、気は宇宙の起源であるといえる。従って、体の生命活動は宇宙の法則に則ったものであると中医学では考えられている。

気概念から発展して、「陰陽論」、「五行論」「整体概念」、「弁証論治」などの理論が発達したと思われる。この中で、私が最も重視するのが「整体概念」である。この概念は体をひとつの有機体として捉え、体（健康や病気）を全体として捉えることである。体の内と外、つまり生体機能と自然環境は密接に関係していて切り離せないという考えに基づく。さらに言えば、心と体はひとつであり、自然現象も関与して、心が病めば体も病むという基本概念が大切であると考えている。

4. 中医学の主な基礎理論**(1) 陰陽論**

太陽と影があるように、対立する2つの「気」、それが陰陽である。陰は物質を表わし、陽はエネルギーを表わす。といってもどちらも単独では存在できなく、バランスを取りながら平衡を保っている。このバランスが崩れた時に健康を害する。陰陽は互いに対立はするが依存もしあっていて、バランスをとって健康を保つものと考ええる。

連絡責任者：重信 隆夫 アニマルクリニック永山公園
〒060-0032 札幌市中央区北2条東7丁目82 ラポール永山公園西棟1F
TEL/FAX 011-251-8333 E-mail: signobutakano@sky.plala.or.jp

(2) 五行論

自然や社会は全て動的であり、この動的な自然、社会と全ての生き物の要素を考察して構築したのが五行論である。地球上の全てのものを5つの要素に分類し、動的な現象(変化)を説明することで、状況や変化を説明しているのが五行論である。ちょっと抽象的な説明になったが、簡単に言うと以下のとおりである。

5つの要素とは、「木・火・土・金・水」で、全ての事物はこの自然界の5つで成り立っているという考えである。以下にそれぞれの要素について簡単に説明する。

- ・木：樹木は幹や枝を上や外に伸ばしたりするため成長、上気、伸びやかという特性を持つ。季節は春。
- ・火：火は炎上するので、熱や上昇特性を持つ。季節は夏。
- ・土：大地の土からは作物を収穫できるので、生み出し、受納する特性を持つ。季節は長夏。
- ・金：金は金属であり、刃物や武器を想像させる。よって社会の変革から派生して清潔や粛降の特性を持つ。季節は秋。
- ・水：水は大地、作物、生き物を滋潤し、下へ流れる。よって、冷たく寒涼で下方に向かう特性を持つ。季節は冬。

この5つの要素は互いに生む、生まれるの関係がある。木は擦れて火を生じ、火から灰や土を生じさせ、土は金属を生み、金属は水を生む(水滴)。これら互いに生むことを相生関係と言う。生む側と生まれる側があるので、母子関係とも言う(図1)。一方で互いに抑制する関係もあり、木は土を克し、土は水を克し、水は火を克し、火は金を克し、金は木を克する。これらを相克関係と言

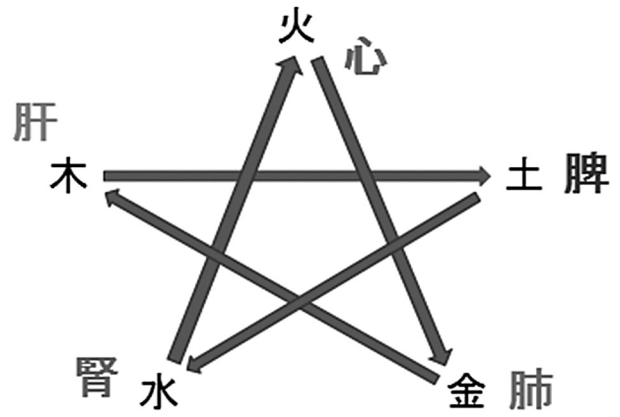


図2. 五行の相互関係(相克)

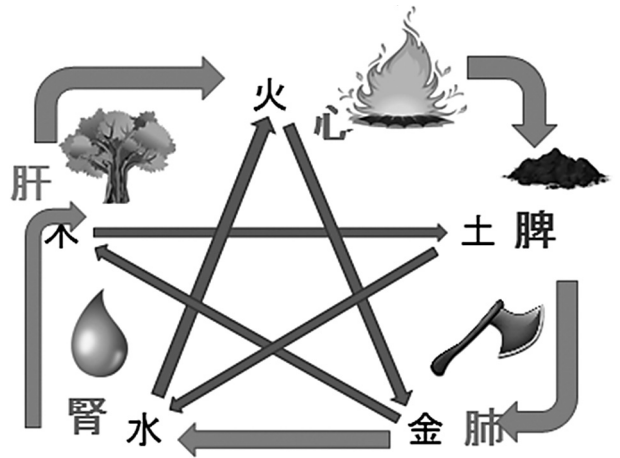


図3. 五行論の相生、相克関係

う(図2)。

中医学の面では、5つの要素を五臓六腑に振り分けて、それぞれの関係の生理関係から相生、相克関係(お互いを助けたり、抑制したりすること)を病気の診断、治療について応用することができる(図3)。

(3) 臓象論

五臓六腑を上記の5つの要素に当てはめると、その特性から肝臓と胆嚢は木、心臓と小腸は火、脾臓と胃は土となる。肺臓と大腸は金、腎臓と膀胱は水とされている。以下に、中医学の「臓」の特性について解説する。

- ・心：胸腔内にあり、外側は心包に守られている。心は血を全身に循環させるとともに、血脈を司る。そのほか、神(精神、意識)の宿る場所。
- ・肝：主な生理機能は疏泄と蔵血作用である。疏泄とは飲食物から生まれた気(水穀の精微)や感情を調節することを指す。蔵血作用とは、血を貯蔵して生理活動に必要な血の配分を司る。
- ・脾：脾は胃から送られた未消化の飲食物を小腸、大腸へと運びながら精微物質(栄養素、気)を生み出

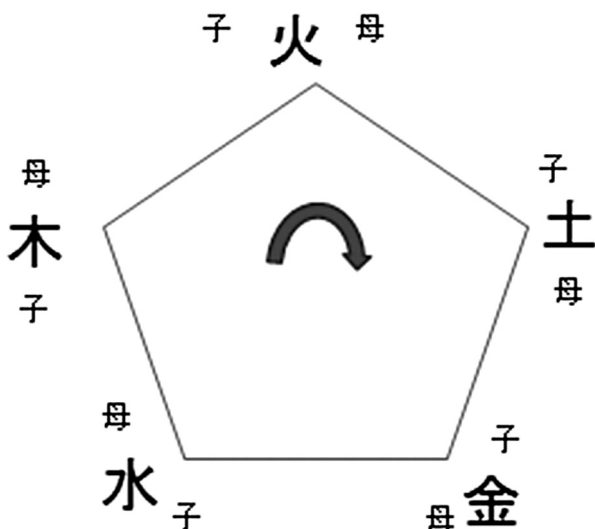


図1. 五行の相互関係(相生)

し、頭部や胸部に送り、心肺により全身に送り届けられる。

- ・肺：肺は呼吸器であり、自然の精気を吸い込み、濁気を体外に出す。また、体で作られた衛気といわれる体を守る気を宣発機能により体に行き渡させる。そして、肅降機能もあり水分や栄養を下に降ろす特性がある。
- ・腎：蔵精、主水、納気という作用がある。蔵精の精とは精気のことであり腎に蓄えられている。主水は腎の持つ気化作用により水液を散布、肅降させる。また、納気といって呼吸して取り込んだ精気を取り込む作用を持つ。腎が呼吸を深いものとし、呼吸を完成させる。

上記のとおり、通常の医学的機能の考えと比べ中医学では少し異なり、解釈が難しい。

5. 中医学の小動物臨床への応用

(1) 中医学診断の流れ

中医学では特に飼い主への問診が重要となる。いつ、どこで、どのような症状を示したのかということ以外に、飼養環境、同居動物の有無、食餌内容、患者自体の性格、睡眠状態等を聞く。臨床現場においては当たり前かと思うが、とりわけ中医学では重きを置いている。まず、望診（望神）を行う。望神は患者の意識や精神の状態を診ることである。望色は被毛、肌の状態を診ることを特に重視する。動物を観察して栄養状態、姿勢や動物の挙動、寒証か熱証か、頭の位置や傾きの有無、四肢の起立状態、耳、毛、皮膚の状態を細かく診る。次に眼診、舌診を行い、眼球の球結膜上の微小血管で体の状態を診断し、舌でも色や厚さ、舌苔の状態から病気の性質や進行の程度を判断する。そして、何より大切なのが脈診である。脈は臟腑気血の状態を表しているの、脈の強弱や微妙な脈状の変化は、疾病の病位の性質、病勢、予後を表し、それにより病証を診断する。人間の場合、脈は手首で診るが、動物の場合は内股動脈で診る。脈の変化を感じるには経験が必要となる。

(2) 治療

治療は現時点では西洋医学の補完療法であり、西洋医学ではアプローチが難しいような疾患（情緒からくる疾患や西洋医学では既に治療のしようがない疾患）を中心に対応している。

治療の基本は「鍼」、「灸」、「方剤」「推拿（スイナ）」である。方剤は漢方薬のこと、推拿は経絡マッサージのことである。鍼灸治療は中獣医学の中心といえる。鍼は

今は通常ディスボ鍼を用いていて、灸は灸点紙という特殊な円形の紙の上でもぐさを焚くのが基本である。方剤（漢方薬）は動物が比較的服薬しやすい錠剤を選択することが多い。鍼による治療は経絡のツボ（経穴）とツボを結ぶラインを刺激する。臟腑と繋がる経絡の経穴を刺激することで、気の流れを調整し臟腑の機能を整え、さらには未病治といわれる病気の予防の効果を発揮する。独自の経穴を持ち、臟腑と属絡関係がある経絡は十二正経あり、他に任脈と督脈がある。灸や方剤も鍼と同様に経絡にある経穴を刺激することで、病気の治療や予防ができる。推拿は主に手を用いた手技である。写真1、2に鍼灸の治療器具を示す。



写真1. 鍼灸の用具
ディスボ鍼（右）、圧鍼器（中央と左）、圧鍼軟膏（上）



写真2. 鍼灸の治療ワゴン
一番奥の箱はディスボ鍼、左側の乾いた綿状のものは「もぐさ」で灸に使用する。左端にあるシートは「灸点紙」で、「もぐさ」を置く円形のシールになっている。手前真ん中のT字型の筒状器具は棒灸を入れて使用する「温灸器」。アルコールランプを使って火を点ける。

(3) 当院での治療実績

正確な統計はこれから調査する予定であるが、当院での中獣医学での治療実績で多い疾患は、椎間板ヘルニア等の運動器疾患、アトピー、アレルギー等の皮膚疾患、腎不全等の泌尿器疾患、難治性の下痢や嘔吐等の消化器疾患、癲癇や前庭疾患等の脳神経系疾患、認知症、手術や抗がん剤治療を行った腫瘍性疾患、その他では情志、つまり感情や精神に関する疾患等が続く。

(4) 治療効果

疾患別には、運動器疾患で顕著な効果がある。痛みや跛行のある疾患に有効であるし、椎間板ヘルニアに関していえば、統計はないが多くの症例で改善が見られる。皮膚疾患は最近受診が多く、鍼灸と方剤、オゾン療法も組み合わせて良好な結果を得ている。腎機能不全では投薬や補液等の西洋医学的アプローチが必要だが、当院ではこれに鍼灸治療や漢方治療も組み込み、西洋と東洋医学の統合医療で効果をあげている。消化器疾患では原因がよく特定できない消化器疾患（下痢、嘔吐）に対しては方剤治療をメインにして、鍼灸治療を合わせて行うことで、時間をかけながらも一定の効果をあげることができまる。腫瘍性疾患は中医学を補助療法として受けたいとの希望で来院されるが、生活の質（QOL）を上げたり、腫瘍治療の副作用を和らげる効果があり、根治治療は難しいがQOLを上げるのに有効である。さらに、てんかんや前庭疾患等の脳神経疾患にも有用であると思う。最近では認知症に対する症状緩和治療を望む飼い主が来

院する。情志（ストレス等の精神的問題）に関する症状は西洋医学的アプローチが難しいと思うが、鍼灸治療や方剤、推拿で良化させることが十分可能である。

6. 最後 に

中医学は一言でいえば「気」の医学だが、「気」は万物の起源であると考えており、「気」は自然界でもっとも重要な要素である。従って、自然界に生きている動物に対して気の調節を行うことで病を治したり、予防することが可能であると実感しているが、それに対する理解は一般の飼い主や獣医師でさえ、まだ難しいのも事実である。飼い主は中医学を「体に優しい治療」と捉えて、次第に支持を得てきている。しかし、中医学を魔訶不思議で不可能を可能とするような過大な期待を抱いて来院される方もいる。中医学も科学なので、そのような過大な期待は禁物であることをきちんと説明する必要がある。中医学は西洋医学的アプローチではなかなかうまくいかない場合のセカンドセラピーであるという様に伝える方が理解を得やすいかもしれない。

今般、北米やヨーロッパで中医学は獣医学の世界でも注目されていると聞き及ぶ。私も診療業務を行いながら、日本でもその波が来つつあると実感している。私自身もまだ学ぶ立場なのだが、中医学普及のため、興味をお持ちの獣医師の方々と共に歩みたいと考えている。そして小動物臨床領域で中医学も主体となりうるということが、理解されるよう邁進したいと考えている。